

今日の講演

「丸吉皆川家日誌」は、江戸時代の藤沢町で有力な商家の一つであった、丸吉皆川家の当主が書き継いだ、約100年間に及ぶ記録である。

今回の講演では、「戊辰戦争150年」に関わらせて、主に慶応4年の記事を紹介しながら、藤沢町・磐井郡「東山」の人々にとっての戊辰戦争の意味について、会場みなさんとともに考えて見たい。

1、丸吉皆川家と「日誌」

(1) 丸吉皆川家と「日誌」

①丸吉（まるきち）皆川家

- ・磐井郡藤沢町（岩手県一関市）の有力な商家の一つ
紅花・煙草（主に天保時代まで）、生糸、薬種を商う

②「丸吉皆川家日誌」

- ・丸吉皆川家の当主が書き継いだ記録

I 天明～天保15年（1780年代～1844） 5代・久蔵（1780～1846）筆
約1100丁（頁）／22万字

II 嘉永6年（1853）～明治4年頃（1871） 6代・喜平治（1895～1874）
約900丁／？字 *慶応3年秋～明治3年分 約76000文字

- *正式な標題 原本の表紙に標題が記されているが摩耗して読めず

③これまでの利用

「幕末の記録をたづねて」（1936年 及川孝一） 記事の紹介

『藤沢町史』、『日本地震史料』 部分的に利用。

- *『日本地震史料』天保・安政の地震記事 「岩手県立図書館蔵」とされている。

④原本調査の経緯

- ・2015年9月 岩手県立図書館での調査。
「皆川家日誌」として①のコピー／②は不明。
- ・2015年12月 ①のコピーを解読開始（佐藤含め、5名～2016年12月）
- ・2016年5月 岩手県一関市での史料保全普及講座 情報提供呼びかけ。
- ・2016年6月 所蔵者が災害研に来訪。調査をお願いして快諾を得る。
- ・2016年9月 原本の撮影
- ・2017年9月～ ②の解読開始（慶応4年分から）

*原本 戊辰戦争部分 「戊辰戦争百五十年」各地で展示予定

- ・7月14日～8月26日 新潟県立歴史博物館
- ・10月26日～12月9日 仙台市博物館

講演者が考える「史料としての価値」

その膨大な記事は、藤沢・磐井郡・仙台藩の歴史はもちろん、江戸時代後期の日本列島の政治・社会・経済の動き、天変地異と人々の関わりについて、これまで未知の内容も含めた内容を多く含む。江戸時代の基本史料として広く共有すべき史料

「青葉山古文書の会」（鶴飼幸子・熊谷新一・志田清一・後藤三夫・佐藤）での解説

(2) 江戸時代の藤沢町

①江戸時代・藤沢町の概要

- ・永代着座・奥山家（2000石）の居館が存在（元禄7年（1694）～）
- ・江戸時代、仙台藩の支配下磐井郡「東山」の拠点都市の一つ。

「藩政時代の藤沢駅は仙台と気仙方面を結ぶ宿駅として、又仙台藩北部の物資の集散地として三八の市日を中心に相当に殷賑を呈した。これは単に地理的關係のみでなく、駅内に皆川、橋本などの豪商があつて、古川以北の紅花、生糸煙草等を買集め、京阪地方に販売し、又彼地の産品を購ひ来たつて地方に商つた事に依ることが少くない」（『岩手藤沢誌』1941年 仮名遣い・漢字は常用に改めた）

②藤沢の商家たち

○文政12年（1829）11月23～24日 近江商人・中井源左衛門の得意先回り

- ・藤沢町の有力商人たちの饗応・絵画鑑賞（『日本都市生活史料集成』8所収）
- ・名前が出てくる商人

皆弥（皆川弥右衛門 本家） 皆文（弥右衛門の弟「分家」）

「先の別家・皆久殿」（皆川久蔵／丸吉皆川家） 「皆久別家・皆忠殿」（皆川忠七）

「後の別家・皆弥殿」（皆川弥右衛門） 「橋栄殿」（橋本栄助）

○「東山は御宝国」—仙台藩の財政を支えた藤沢の商人たち

「丸吉皆川家日誌」天保4年凶作時、仙台藩代官が藤沢町商人に貯穀の他郡への分配を求めた際、発した言葉「全躰東山者御宝国にて、兼て貯へ在之土地ニ候」

○戊辰戦争時 仙台藩出入司・松倉恂の述懐（明治末年 今泉篁洲の聞き取り）

- ・仙台城下町商人に御用金を忌避され、大肝入を通じて東山、登米の生糸を横浜で売却、戦費9万両を確保する

*丸吉皆川家 松倉（および手塚（水科）正左衛門）の配下で生糸取引にあたる？

「（前略）戊辰の時に私が戦が始まって困るから町人のいい者を選んで「戦さが今此の町に押して来て御前方アタマの上を鉄砲玉が飛んであるから・・・」と云つてもとても信ずるところか「なあにそんなことゆつて亦た御用金を召し上げて遣つて仕舞うのだべ」などとゆつてとてもほんにしないので、しかたなく々々とう々々郡村に相談したねす、郡の大庄屋の様なふるくかたい者ともへ相談したねす、ところが郡村の方が話せたねす、しかし金とて有りませんが金に代ゆる品物なら出しますと云ふのですからそんならなにがよかろうと相談しましたが生糸と決めました。東山だとか柳津とかより生糸を集めさせてそれを横浜に送つたねす、なんでも二百個ばかり集まつたねす・・・一個さあ・・・其の時七〇両でしたか・・・横浜へ出したらありがたいことに一梱七〇〇両づつで立ろに九万円になったねす、それで戦さなどの入費がたすかつたねす、全く郡村でたすかつたねす（後略）」

(3) 戊辰戦争—研究の状況

①戊辰戦争とは

・「一八六八年（慶応四年・明治元年）正月三日に京都南の鳥羽・伏見で戦争が勃発し、翌一八六九年（明治二年）五月十八日に五稜郭が開城して箱館戦争が終結するまでのほ

ば一年半、五一八日間にわたって展開された国内戦争である」(奈倉他 2018)

②研究状況(奈倉他 2018)

- ・「欧米列強注視の下、この内戦を通じて、京都新政府が自らを全国権力となし得たにもかかわらず、内戦下での政治・社会・生活・思想のあらゆる文化での変化に対する具体的説明は不十分であった」
- ・「近代兵器」を駆使し、相手方を「賊」と規定して戦われたこの激烈な内戦が、社会と人間の深部に刻印した影響は計り知れないものがあったはずである」

丸吉皆川家当主・喜平治 当時73歳

戊辰戦争下の藤沢・仙台藩をどのように見つめたか。

奥羽鎮撫総督軍が仙台に到着する慶応4年3月頃から、仙台藩の知行が削減される明治2年中頃までを、主要な記事を紹介してゆく。

* 戊辰・東北関係の流れ(別表)

2、戊辰戦争下の藤沢・仙台—丸吉皆川家日誌を読む①

(1) 鳥羽・伏見戦後の仙台藩

①鳥羽・伏見の戦いと奥羽諸藩

- ・鳥羽・伏見の戦での旧幕府軍の敗北の情報が入り始めるのと同時に、仙台藩の対応や、重臣層の動向に関する情報を得て、記録している。
- ・慶応四年一月末 仙台藩、会津藩・上ノ山藩から「御加勢」を依頼されるとの情報その後、鳥羽伏見の敗報を受け、会津藩の使者は「涙を流」して帰国

* 仙台藩の選択を注視する喜平治

「徳川公朝敵となされ候につき、官軍御発向にては、御手前様にも徳川家へ御加勢はなされまじく候ことも、何様御評議あいなり候や、知らぬ事なり」

②「奥羽の御旗頭」

(大意) 慶応四年二月廿七日の情報

- ・新政府から仙台藩に対する会津征伐、奥羽諸藩への徳川家征伐の指示、奥羽諸藩が仙台に使者を遣わし、仙台を「御旗頭」として諸事従いたい、としているらしい。
- ・仙台藩では、「大條様」(大條孫三郎 伊達慶邦の建白書を持ち上洛中)の帰国を待っている。
- ・会津様は、「上方戦」(鳥羽・伏見)にて一万人を失い、仙台の相手にはならないので、兵糧の無心や、征伐の回避を願う使者を何度も送っていた。
- ・「江戸一橋將軍様」からも使者が来ており、屋形様(慶邦)や御一統様は迷惑している。京都から「(錦の)御簾」と大條様が下って、様子次第では御和談にもなるだろう。

仙台藩は「奥羽の旗頭」 新政府に従う奥羽諸藩と、会津・徳川家双方から頼りにされる(*「奥羽の旗頭」としての仙台藩(栗原2018))

(2) 奥羽鎮撫総督軍と仙台藩の会津出兵

① 3月23日 奥羽鎮撫総督軍、仙台城下へ 養賢堂に駐屯

鎮撫総督・九条道孝 副総督・沢為量 参謀・醍醐忠敬

下参謀 世良修蔵(長州) 大山格之助(薩摩) 薩摩・長州・福岡藩兵

② 4月11日 鎮撫総督軍、仙台より岩沼へ

- ・「錦の御旗は日の丸にそうろうよしなり、金銀にて縫い付け御立ち也」
- ・「御簾は日に詠みそうろうて光り輝き、誠に尊き御簾なり、右の両日の御発駕御行粧は諸人目を驚かす、誠もって見事なる拝見物なり、一体之惣人数大凡七万人との御人数と話し候」

* 「長州の家人」の評判

- ・「九條様へ御付き添えの士ひ、長州の家人、誠に白学^(博学)多才の賢人壺人これあり、諸事この仁指し行ない、御手前の御陣方へ□夫々と添心これあり能く万事を計るに仁物之義は□軽得、実事よろしき人と諸人噂あり□□九條様御事も誠に結構なる御方なりと申し候、仙台の御吟味□諸事御任せ、コハミ（拒み）等これなきよしなり」

③ 仙台・会津で開戦の一報（*4月19日土湯口の戦い→4月29日頃）

「会津征伐、いよいよ和談にならず、御人数御繰りだし、四月十九日午の刻より巳の刻まで戦争す、右絵図面ならび御行列御人数押し出しの絵図面御名付け来る」
戦の10日後には藤沢町に「絵図面・御名付」が流布 それを写す喜平治

* 軍の装束

「近年軍装束は古と違い、甲は用いず陳笠に縫い詰め鉄砲と唱え候、着込クサリ入、またはから金、銭文セン縫い付け、中形などの如く、真綿入、上は羽二重にて仕立て、その上着は半切着用にて、陣羽折は様々、仙台印ニ黒の五分と云う唐切にて廻りに付ける、月印一統なり、右の品仙府店々売切、外より買い集め、物々片ヨリにて売り候由なり」

「この節、古風の支度は松山茂庭様ならび外一人、日本風のご装束なり、かえって大いによろしく見える」

④ 閏4月25日 会津攻めの中止

○会津攻め中止、一関様は22日に御帰城、屋形様（伊達慶邦）・御曹司様（伊達宗敦）も御帰城との情報

* 屋須弘平の藤沢町来訪に関する記事

「当所御家中 [] 安老御子息弘平和光、五ヶ年以前には医学修行のため江戸表へ登、修行中蘭 [] 芸能秀を表国人へ [] フランスに渡り、三年半ほど留る、 [] 白石まで来候得ば、御人様に付き、陣所へ [] 御召連られ、廿五日当地江へ着、すなわち異国人同様の風俗也、しかし遙の遠国へ渡海して、誠に珍らしき事なり、フランスはフランダノ南隣国なり、日本より寒と御咄しなり」

- ・喜平治の感想「近年はアメリカ以来、異国人入り込み、又は当方よりも諸異国□□□諸国の風俗を見聞、言舌も大分通じ、□□国は隣国の様相咄し、古の京大坂を物語る如くあいなり候、然るに会津御陣御ひかえに相成り候事と子細あり、追て書き申すべく候」

屋須弘平 藤沢町の医師・屋須尚安の子。江戸・横浜で学んだ後、語学の才能を見込まれフランスに留学。維新後、天体観測のためメキシコへ渡り、後グアテマラにて写真家として活動。

→ 戊辰戦争時の弘平の動向を知る記事

→ 喜平治 弘平と交流 フランスなど異国を「(日本の) 隣国」、「古の京都や大坂の物語と同じ」と受け止める

- * 喜平治 万延元年のアメリカ使節団 翌二年に情報を入手（「仙台人・某」より）
アメリカの大統領制／社交／「鉄の道」／「テレカツト」（電信）

○屋須弘平は5月25日まで藤沢町に滞在 その後「御用」のため仙台城へ召し出される(登用)

「異国フランスへ三人程参り居り候由、品々御相談の事共これあり、弘平老の儀は異国人の談合はなはだ弁利なることゆえ、通事など御用に御向けなしおかれ候や、なおさら蘭学諸事によく通達によしにて召し出される」

(3) 奥羽越列藩同盟の結成

①奥羽越列藩同盟の結成

閏4月11日 会津藩の謝罪・歎願を周旋

②様々な噂—「会津攻めは薩・長の謀略である」

i 「薩長の謀計」 薩・長は仙台を奪い取るため、但木公・三好公を語らい、九条様らを仙台に下向させた。それを、京都から帰ってきた御曹司様と大條様が、京都での謀計を見抜いて会津攻めを止めさせた。この頃、鍋島勢が船で松島に上陸したのも仙台落城を見計らったのである。(5月上旬)

ii 長州様、薩州様は「何かと威張って色々謀計」。徳川家の「根を断ち根をからし」、後に「大將軍」になろうという「下地」か。南部へは、八戸様が薩州より入られる方(南部信順／島津重豪の子)で、「大南部様」(盛岡藩)に御談合し、「仙府の透(すき)」をうかがっている由。一関では磐井川の長橋を撤去し、川下でせき止める用意をしている。(五月下旬)

iii 岩沼陣にて、九条様は実は「三男」であること、このたびの会津征伐は、薩州、長州、筑州などが「朝帝」を拵え、勅命として自分たちを下したと「実事に落とされ候」。よって(会津)御征伐を止め引き返した。敵は味方、味方が敵となる。関東近国より西方は敵、東方は味方。ただし南部だけは油断ならないという(五月下旬)

iv 屋形様と上杉様は九条様から実事を知らされ、直々に薩長の「謀上」瀬良修蔵と言う者が白河にいたのを、八丁目駅より御小人を2人廻して捕らえ、詮議の上切らせた。修蔵の持ち物には「征伐の巻」ほか「謀計・偽の事、御国方の諸士連判一味の□名前書」が委細にあった(五月下旬)。

③ 伊達慶邦と会津・庄内・徳川家

○慶応4年6月初めの情報

- ・庄内より20万両、会津より2万両、徳川家より70万両と兵器の支援を受けた、との噂
- ・涙ながらに藩存続への支援を訴える「酒井若殿様」(忠篤、15歳)に、「貴公は御年の大名、さような涙に及ばぬもの、花咲く節も有る、御案じめさるな」と励ます慶邦。喜平治「屋形様の御仁勢・御威光弥増しなり」と評価
→「何様大平成るところ、万民の□□願うところなり」

④ 6月初旬「軍話禁令」

- ・「毎日毎日軍話止まず、次ニ不天気話専らなり、上々様方の揉み合い乱にて下々同様天に通じ、天気定まらず、乱同様なり、御城下表軍咄停止の御触なり」
- ・「軍咄巖に相留めらる御触れ出候、この節角力・芝居[]相免じられ、勝つまで[]興業御構いなしの御触れなり」

1868年(慶応4・明治元年)は冷夏 *翌明治2年と続けて凶作

「世の中の乱れが不気候を呼ぶ」戦争の話題を禁じる代わりに「勝つまで」芸能興業許可

⑤天候不順と「今上皇孫」

「連日の不天気常ならず、いよいよ不作に相なるべき模様なり、誠にこの乱世には殊に下々難儀の節あいなるべし、ほとんど当惑の事なり、上々様御政事崩れて、国々諸侯方起り乱となり、下々は金銭崩れ乱になり、然るは天気も乱となる道理と相見え候なり、古の乱世の時より、このたびは軍戦当時少しと申すとも、一体国々事多く乱れ候事は、古より乱れ候様に相見え候、当世の今上皇孫ハ未だ御幼年、もつとも御即位の御事□□候、よって能く納まらず（法）□□か」

- ・上にては政治の乱れ、下々は戦争による経済の混乱、それが天に通じて天気が乱れる
- ・「今上皇孫」（明治天皇）は幼年のため、それを押さえられない（→批判？）

*天候不順

6月6日～7日の雨 北上川大洪水 七日町・二日町・西郡町

(4) 戦争と藤沢の人々

①四月十九日 藤沢町「組抜衆」の動員・御用金賦課

「今日当所組抜衆中、御出入司御支配の分三人、本家ともに登仙出立す、御郡奉行様御支配未だ御日指これなく候、しかし組抜は常々よろし、と申して、右に成り候ところ、この節何もイヤ成る事と大いに後悔す、もつとも大いに金入用に成り、手前はその頃大いに進められ候えども、組抜に相成らず、よってこの節は軍場へ御召し遣われ候事もこれなく、一方の安心なり、しかしながらかくのごとき乱世、軍と相成り候ては百姓前も事多く、諸人足この年は御用金も三方四方より御無心、御用甚だ困り、難渋致し候事なり、追々段々百姓前難儀に及候時節に成る」

- ・「組抜」 軽格の仙台藩士 ここでは献金によって身分を獲得した有力商人の家々藩士として仙台城などを警護する義務 → 戦争が起これば戦地へ動員される
- 喜平治 強く勧められたが、身上がりしなかったおかげで戦争に行かなくていいと安堵 → 戦争や軍役は忌避する

②五月十一日頃 戦場から遠く離れて

- ・「御城下より向南御郡、道中筋伊達郡□駅場人足千人千疋の馬相備えおきそうろうえども、軍止まず、まこと難儀、迷惑このことにて目も当てられぬ次第のよしに候、当年は関国より奥羽の軍、乱世騒ぎなり、百姓難儀、当分奥郡、当郡などはいささかも楽に暮らしおるなり」

③6月下旬 魚の値上がり 沖合に軍船多く、漁に出られず、また漁獲を軍人に奪われるため

④7月1日 山立獵師2名（戦地へ）出立

⑤7月中旬 御領内にて金・銀・地金・女共かんざし、金具等御買上、からかね火鉢など無用之品、寺院釣り鐘吟味のうえ指し上せるよう仰せ渡される

⑥7月中旬 東山の人々の動員

- ・農兵 7月19日「東山にて式三百人・・・甚だ迷惑のこと」

藤沢町 次男・三男にて5人

*8月上旬 千厩での農兵訓練

「此間東山分三百人農兵、百姓前二男三男、または兼て行跡荒々しく、農事など嫌ひあふれ居者ども、千厩にて御見抜、白山堂的場あたりにて兵法鉄炮稽古仰せ付られ、小屋など掛り、米壺人分七合半積を以って下げ渡し、日数十日ずつ修行、御代官様御見分にて、段々入替相成り候、尚また御城下より師匠成る御方相下され、稽古致させ候」

・「無判の獵師共」六・七人

* 8月中旬「東山獵師ども先分百人組御暇くだされ無事に帰る」

「仙台之陣中ハ [] 丈夫に下され、酒共に度々下され、御飯は望次第、四度ずつ給ると申す」

⑦8月上旬 戦争に伴う流通の途絶 物価の騰貴

「当国方は軍事に付、道中不通用、海陸とも、依て不足、高直なり」

⑥9月14日 東山大肝入など仙台藩「奥郡」大肝入、仙台城にて屋形様に拝謁。

・ごちそうを受けた後、「軍事」その他に入用のため金10万両の御借上を命じられる。

下宿後、生糸にて納入する旨を返答して御暇を受ける。

喜平治「奥方は誠に静謐にて暮し候方大に閑なり、御貸上などの諸上納に苦く候えども、南軍場近村へ競べ候ては、至って心易し、大家も潰^(潰)され痛み入り候次第なし、大肝入衆中も大いに勘弁にて御下りなり」

(5) 奥山家の戦い

* 奥山家 永之進清晴 会津出兵から手勢20人・不断組一小隊で従軍

①8月上旬 相馬（福島県相馬市）での戦闘の情報（8月1～2日黒木の戦いか）

・奥山家の若旦那様（栄之進 26歳）が銃撃で負傷

・奥山家家中・千葉東太夫の子息17歳が銃撃で即死。13日にその知らせが元結いとともに藤沢に届き、14日に葬儀「痛み入り候」。

* 藤沢町にて「出陣登り御家中ならび其外共」への餞別、「所つなぎ」、「無事安全に帰宅所願御祈祷、夜籠り、通夜、色々様々ナリ、何れ一統痛み候」

②8月下旬 奥山家の「四天王」

「当所の若旦那様には且て働キ来候御事聞こえこれなく候ところ、奥山御家中の四天王の誉□□若武者四人これあり、一は斎藤勇助旦那方御子息権平、皆川勘蔵御 寅之進、熊谷直衛御子息逸見、片平鷹之進和光 四人也、軍中に大いに能く働くと評判す」

3、戦いに敗れて—丸吉皆川家日誌を読む①

(1) 戦局の進展

①江戸の情勢と仙台藩

○6月上旬（5月15～6日）上野戦争の情報

・「この節、薩摩勢所々乱妨荒らして、諸国困り難義する」

→「江戸方にては、奥羽の大將仙台様早く攻め登るよ様に希みおり候よし」

②7月上旬 戦局不利の情報

「軍も前々は此方敗軍多シ、品ハ西国方鉄炮壱筒に三放シ四放と打ち、もつとも皆替えず筒多シ、仙台は軍に馴れず、一通之炮発、もつとも廿日三十日の入れ替え故に軍に勢力を入れ替えず候ゆえに、勝利少し、このほどハ替り番これなき様に仰せ渡さる」

・「細野や□□夫（細谷十太夫）という御士」の「御法れい」を用いる。

* 「誠の軍人」は、細谷、富田様（小五郎か・7月1日平潟の戦いで奮戦）、芝田の御家督（賛三郎・民部の子）、鮎貝様（鮎貝太郎平）

③8月下旬の記事

「仙藩諸將諸土方働かず、よく働く人少なし。細谷十太夫という人、敵方にて細からすと唱えて恐るる由・・・関東御旗本当方へ加勢の人々、仁義組とか言い、仙藩の勢働かずへたなるを笑い居り候なり」

③9月3日頃の記事 「四方の大敵にて御当家大難の御時節なり」

(2) 敗戦、その後

○仙台藩 9月15日降伏申し入れ

12月7日 伊達慶邦、宗敦、東京にて謹慎／家名存続・28万石下賜

12月12日 伊達亀三郎を当主とする新封仙台藩

①同盟諸藩への対応

○8月下旬 「御家中熊谷逸見旦方の日記」による仙台城下町の情報

・落城・敗走した、磐城平、棚倉、湯長谷など現在の福島県域に所領を持っていた各大名・家族・藩兵が仙台城下町に避難、収容される

・仙台城下町の「大屋敷」(家中屋敷か)、寺院、「町方大家」に収容(大町一丁目日野屋＝中井新三郎／中井家仙台支店か)

* 9月6日頃 「近国の御諸士、落ウ人、大凡三万人ほど」

* 9月15日頃の情報 郡方へ人数割付け・仙台城下町の情報

・「御他領御客人・落人御調、七千二百人程・・・達者にて御用に立つ分は夫々御遣いになり、老弱女子など御郡方へ割付け」

・「御城下も別国の如し、異国人風俗の人ばかり多し」(→各藩兵の洋式軍服?)

②長岡藩兵の藤沢収容

・9月24～25日 約330人程

・丸吉皆川家では10名を宿泊

「平岡豊次郎、脇野喜佐八、内藤丈三郎、鈴木磨内、小山新蔵、我妻保三太、牛込染吉、須佐友八、小林口弥、桑原益之助・・・手前へ休候土方ハ相応之人物也」

「フランスの蠟炮貫ひ候所、誠に結構、手キレイ成る細工、日本の品及ばずよろし」

・9月30日 長岡家中30人程が仙台御城下より、藤勢寺へ入れる、男・女子まで

・10月29日 「越後長岡人三十六人の内昨日五六人出立」 *長岡藩再興

・11月22日 長岡御家中「惣払出立」、病人も大体本服、疵も直り、店にて薬を詰て売

*長岡藩士からの風聞

「此御方は御主人様より米拾俵金拾両下され候との事相咄し候由なり、殿様御本国に御入り相成り候えば、御城ならび御城下町家ども普請に相成り、町家百姓へも右の通金米下され候由、全体御金持にて廿万両、御立抜の節堀中へ入れかくし置かれ候由、右にて再建成られ候との事なり」

*仙台藩の諸藩士への接遇をめぐる風聞 10月29日頃の風説書

「仙台 伊達信夫の外に四拾万石の御加増 右は落城人神妙の取り扱い候につきかくのごとし、御曹司様奥羽吟味役、屋形様二ヶ国御太守役仰せ付けられ候事」

→喜平治「外へ参り候書付と少々違い噂書きなるべし・・・虚説書としか思わず」

しかし仙台藩が、江戸幕府における奥羽大名のなかで特別な役割を持つ、という認識を反映

(2) 仙台藩の降伏をめぐる

①伊達慶邦の謹慎

- ・「丸吉皆川家日誌」十月初旬 八月の宇和島藩あて慶邦の官位剥奪の勅書を写す
→「御手前の御吟味とは大いに相違相成り候」
- ・10月3日付の触れ 伊達慶邦の亀岡御殿謹慎の触れを見る
- * 仙台藩降伏の文章、重臣への処分など 11月始めに記載

*なぜ敗れたのか—皆川喜平治の認識 将に恵まれず、慶邦が失望して隠居するのも当然

「御国方、これまでの軍御勝利これなきと、諸将の内に謀反、敵方へ内通の人五六人、外口口とも少なからずあるゆえに、全くの御勝利これなく敗軍多し、よってこのごとし、屋形様にもそれゆえ大いに御苦痛あそばされ、此節は御老耄の体にならせられ、御隠居あそばされ候よし、ごもつもの御事なり」

②10月初め 仙台城下町の情報—戦争継続

- ・仙台城下表、落城の風聞が出ているがそうではない。
- ・フランス人、イギリス人が徳川家・仙台を仁義の国風と賞賛して「国を建てる」
- ・仙台藩兵一万人、「赤組」（額兵隊）千二百人など調練している組があり、「合戦を好む」。ここに徳川家6000人程が味方につく
- ・「御和談」の進展で、軍は差し控えるとのこと

*9月3日、榎本武揚と土方歳三、仙台城にて戦争の継続を訴える。その件と関わる風聞か。

- ・「仙府御諸士は七分通りは合戦を好み、三分通りは好まずという。追々如何」
- ・「この頃も徳川勢へ一万五千俵遣わされ候よしなり、官軍見て、何方へ遣わす米なりと問う、御挨拶には、徳川家より預りの石、あい渡し遣わし候なりとお答えなり」

③10月12日 徳川勢、船にて脱出の情報（→榎本艦隊の脱出について）

「徳川勢石之巻より廻り、気仙沼へ着船して七百人程、このうち当方の士もこれある由、市中へ罷り越し、飯を望む、よって家々にて飯を握りにして指し出し、船中にも入れ、三日ほど滞留いたし、南部にて津軽を責め打つと聞き候間、同所へ加勢に罷り越候よし咄しに候ところ、諸払い相立て出立、船何方へ参り候や分からず、格別の損痛にならずと申し候、御城下はまず静謐に相成り候よしなり」

* 磐井郡・登米郡での一揆情報

- ・11月15日頃 西磐井山目での一揆情報
- ・12月4日 登米郡狼河原町「大騒動」
- ・12月6日 上川筋四ヶ村百姓一揆 松川町、黄海町、西口村、関田、千厩
- ・12月27日（東山）北方27か村「大騒ぎ」五千人程 村々の肝入・大肝入宅を打ちこわし

→「御上様にても公辺へは御都合宜しからぬ事に相聞得候、屋形様のおため宜しからず候」

(3) 「仙台領東山」の解体—仙台藩・二八万石への減知と東山

- ①明治2年一月二〇日頃 伊達家28万石減知 領地の明細・亀三郎家督の書付を写す
- ・磐井郡は土岐隼人正（上州沼田藩）→松平大和守（武州川越藩）

→「誠に是非なき次第、嘆かわしき御事ニ候」

②奥山家の処遇 領地召し上げ・離散

「よって当家中へも仰せ渡される御注進にて、御家中一統暇下され候仰せ渡されの由、皆離散ちりちりとなり、にわか立ち退きのところに迷惑難義のことどもなり」

→仙台城下へ登り主人を助けるか、百姓になるか。陪臣一統は「品替わり百姓の取り扱い」

③「組抜」への処遇

・「百姓前へ下され候知行、昨十九日書き上げ候ところ、これまた同様御召し上げ候事也」

・「当村手前を始め（御知行高一貫五百廿文）本家宮三郎組抜にて大高なり（貳貫五百文の内持高あり）、何れも同様、去年の頃頂き候御知行などは、狐に引かれ候ようなり・・・

・本家宮三郎追々困窮に至る」

*喜平治の嘆き

・「軍にては金を遣い御知行ばかりにて、右を召し上げられては何もこれなく候、一軒屋敷のみ立ち続きかね候よしなり、手前を始め親類共もみな困窮に相成り、甚だ難義に及び候、この我が身も七十四歳になり、六十三四歳よりいよいよ病身になり、数年床中に隠れ居り、無類の乱世に逢って心痛のみ、長生きはまことに無用なり、生き過ぎ候」

・「後世、組抜などは誠に無用の立身と申し、夢の如くなり」（献金させられた上、従軍させられて戦死し、さらに知行まで召し上げられた人もいる）

④東山南北の引き渡し

○明治2年5月15日 北方・安藤対馬守、南方・松平大和守 一関領はそのまま
領地・鉄山・塩場

「伊達家三百年来の御大家、百万石の御領地、このたび召し上げられ、屋形様始め上皆様、何様なさせられ候御事か、すでに御つづれになさせられ候次第、まことにお痛ましきありさま、申すばかりなく、下々までなげかわしく候」

⑤苦難の先に

○明治三年二月十日 千厩での「俄祭り」「組合祭り」

「十日初午、千厩町へ当る、よって火鎮の俄祭り、御輿秋葉山権現御祭へ巡行、屋台仕掛祭拾五六相出、賑々敷、存のほか結構なる祭、小踊などあり、三日程賑ひ候事、この節柄ゆえ、組合祭なり」

こんな時だからこそ、みんなで祭りを行って盛り上がる

おわりに

1、丸吉皆川喜平治にとっての戊辰戦争

○種々の情報収集 自分の家・地域・「国」（仙台藩）はどうなるのか

*戦争参加への忌避感

○仙台藩・藩主に対する信頼感 藩の枠組みを前提とした生活 その解体を嘆く

「母国」としての仙台藩への愛着 「大国」としてのとらえ方

それが消滅することの心痛 大国を敗戦させた重臣への批判

○

「安定をもたらす」存在としての藩主

2、各種情報の意義

○幕末期の仙台藩 未見・初出の情報を多数

・「正確性」は十分精査する必要 ただし「正確か否か」にとどまらない価値

*「風説留の世界」(宮地1998)

・身分・地域を越え政治・社会情報の交換 →ジャーナリズムの端緒・幕末政局を規定

→「丸吉皆川家日誌」 磐井郡東山、仙台藩領における出来事・言論状況の記録

・一つの出来事に関して多重に情報収集 情報の精度を上げようとする

→皆川喜平治の情報に対する態度 「虚説」「噂」「風聞」の書き分け

3、「丸吉皆川家日誌」の保存・継承・活用

・「地域の宝」として生かし、将来に伝えていくために必要なことは？

(参考文献)

・『仙台市史』通史編6近代1 (仙台市 2008年)

・宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』(岩波書店 1998年)

・木村紀夫『仙台藩の戊辰戦争 先人たちの戦いと維新の人物録』(南北社 2015年)

・奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点』上・下 (吉川弘文館 2018年)

* 古文書の保全について

- ・ 地域に残された古文書・文書記録などの所在をご存じの方
- ・ 先祖から受け継いできた古文書・文書記録の保存にお困りの方

ぜひ下記までご連絡ください

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク

980-8572 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉468-1

東北大学災害科学国際研究所 歴史資料保存研究分野気付

2018.7.1 藤沢町歴史シンポジウム「戊辰戦争下の仙台藩・藤沢の歴史」
「丸吉皆川家日誌」に見る戊辰戦争前後の藤沢町・仙台藩（表）

佐藤大介（東北大学）

（表）戊辰戦争関連略年表（『仙台市史』通史編6近代1より）

1867年10月14日	将軍徳川慶喜、大政奉還を上表
12月9日	王政復古の大号令
1868年1月3日	鳥羽・伏見の戦い
2月15日	伊達慶邦、奥羽の有力五大名に同心協力を要請
3月23日	新政府の奥羽鎮撫軍、仙台に入る
4月11日	仙台藩、鎮撫総督の命に応じて白石出兵 江戸開城
閏4月1日	関（宮城県七ヶ宿町）で仙台・米沢・会津三藩の家臣が会合
閏4月11日	白石で奥羽十四藩の家臣が会合（奥羽越列藩同盟）
閏4月20日	鎮撫軍下参謀・世良修蔵討たれる。 会津藩、白河城を攻略
5月1日	政府軍、白河城を奪回
5月上旬	奥羽越列藩同盟なる
5月18日	鎮撫総督九条道孝ら、仙台を發ち秋田へ向かう
6月	奥羽北越同盟軍政総督府「討薩の檄文」を發する
6月16日	政府軍、平潟に上陸
6月24日	政府軍、棚倉城を落とす
7月1日	鎮撫総督九条道孝、秋田に入る 秋田藩同盟離脱
7月2日	輪王寺宮、仙台城下の仙岳院に入る
7月14日	白石城内に軍議所が設けられる（奥羽越公義府）
7月29日	政府軍、二本松城、長岡城、新潟港を落とす
8月11日	駒ヶ嶺で仙台藩兵と政府軍が戦闘
8月23日	政府軍、若松城下へ侵攻
8月26日	榎本武揚率いる旧幕府艦隊、松島湾に入る
8月28日	米沢藩、降伏を申し入れる
9月15日	仙台藩、降伏を申し入れる
9月22日	会津藩降伏
9月23日	庄内藩、降伏を申し入れる
9月24日	盛岡藩、降伏を申し入れる
10月6日	仙台追討総督四条隆謨、仙台城に入る
12月7日	伊達慶邦・宗敦、東京での謹慎を命じられる
12月7日	伊達家の家名存続、28万石下賜が決定
12月12日	伊達亀三郎を藩主として、新封仙台藩が成立